



自主夜間中学「札幌遠友塾」で授業に集中する人たち（12月9日、札幌市中央区で）＝田村充撮影

自主夜間中学とは

自主夜間中学は、戦争や家庭の事情、病気など様々な理由で中学校に通えなかった人を対象に、学ぶことを通じて夢や希望をかなえてもらおうと設立されている。市民ボランティアによって運営され、授業料と賛助会費、寄付金が活動の原資となる。全国に少なくとも25校あるとされている。

道内では1990年に開校した「札幌遠友塾」がさきがけ。同塾では2008年度末までに約280人が卒業した。授業は毎週1回、夜間に1時限50分の授業を2時限行い、3年で卒業となるが、再履修も認められている。国語、数学、英語、社会の4教科を学ぶ。

札幌以外に旭川の「旭川遠友塾」(08年4月開校)、函館の「函館遠友塾」(09年4月開校)、釧路の「くるかい」(09年5月開校)の3校がある。

「札幌遠友塾との出会いは私の宝物」。札幌市北区在住の主婦酒井順子さん(66)はこう語る。

小学校4年生のときに母が病に倒れ、幼い妹の手を引いて通学した。妹が教室でむづかると、授業を妨げないように帰宅するしかなかつたという。中学卒業後、苦学の末に看護助手となつたが「小学校時代の学習は虫食い状態に終わつていい」との思いは消えなかつた。

病院に勤めていた1990年、同塾の開校を報じる新聞紙面を目にした。「学

び直したい。夢がかなうのかな」と、記事をスクランプして保管し、退職を機に、2004年に入校した。待っていたのは手作りのプリントで親身に教えてくれるスタッフたち。「真心のこもった教育で、物事の考え方がどんどん広がつていった」と振り返る。

3月には再履修を含めて5年間通つた同塾を巢立つ。卒塾後は札幌市内の定時制高校に入学する予定。「遠友塾で培つたことを糧に生涯学び続けたい」と語り、希望に胸を膨らませている。

札幌市の主婦
酒井順子さん 66



戦争や病気が原因で、義務教育を十分に受けられなかつた人たちが学ぶ自主夜間中学。受講生は白髪交じりの初老が多い。英語や数学といった教科を熱心に学ぶだけではなく、互いに切磋琢磨して、人間としても成長を続けている。

「絵を描いて考えてみようか」。12月9日、午後6時を過ぎて「札幌市教育文化会館」(同市中央区)の一室で、札幌遠友塾3年生の授業が始まつた。1時限目は数学。出席した25人の多くは60歳以上だが、表情は真剣そのものだ。

この日の課題は「次方程式。講師を務めた元高校教諭の男性は、変数の「X」を使って代わりに「袋」の絵をホワイトボードに描いた。イメージをわきやすくするための工夫だ。

「袋を4倍にするってどういふこと?」。講師が質問すると、「袋を4倍にするってどういふこと?」。

「袋を四つ描けばいいんじゃない」とある女性が答えた。「そうです!」。講師が笑顔で応じると、女性はうれしそうに目を細めた。和やかな雰囲気の中、50分間はあつという間に過ぎていった。

10分の休憩を挟んで2時限目の英語の授業が始まつた。翌週に開かれるクリスマス忘年会で披露するクリスマスソングを、英語で合唱することがこの日の主な授業内容。

「We wish you a Merry Christmas」(クリスマスおめでとう)

指揮者を務める出席者の男性が、星の付いた指揮棒を振るのにあわせて、全員が声をあわせ



学び直すうれしさ

学校に行けなかつた子供時代

る。講師の女性から「アンコール」と声がかかると、教室にはどつと笑いが起きた。

その後、英語の短文を復唱。講師は「自分の一日を英語で書いてきてね」と宿題を出して授業は終了した。

25人はめにめに「See you next week」(また来週会いましょう)と声をかけ、それぞれの家路に就いた。時刻は午後8時半になつていて。

休憩時間の雑談などでは、それこれがこれまで歩んできた自分史に話題が及ぶこともある。

札幌市厚別区の主婦(66)は、中学生のとき、実家の農作業の手伝いに追われ、通学できたのは年に半分ぐらいだつた。さらにも父親の暴力にも悩まされた。以来、生きるこの意味を自問

自答しながら約50年を過ごしてきたといふ。

だが、同塾に参加して、クラスメートから火の海を着の身着のまま逃げた戦時の体験や、戦争で肉親を失つた悲しい過去を聞いた。友人たちがこれでも笑顔を絶やさなかつた。

女性は同塾の1月の「学級たより」に「心のキズ」と題する詩を寄せた。

「世の中できずつき なやみ 苦しんだ そのすべてを おしながし 清い水として 心に 流れる 遠友塾のそば 心の 水のすがすがしさよ」

女性にとって遠友塾は、学ぶだけの場ではなくつていて、同塾の門をたたいた。

授業では「右」と「左」の筆順の違いなど、戸惑うことも少なくないといふ。でも、黒田さんは「些細なことでもいろいろと覚えられることがうれしい。人生いくつになつても勉強ですから」と笑顔で話している。

したのが「札幌遠友塾」のスタッフを8年間務めた今西隆人さん(53)。遠友塾とかかわりをもつようになって、昭和一ヶタ生まれの世代が、どんなに苦労して青春時代を過ごしてきたかを改めて知つたといふ。だから、今西さんは「学友と一緒に学びあい、喜びも分かちあつてほしい」と日々願つて、函館遠友塾の運営に当たつている。

生徒52人のうち、9割は女性で、9割は70歳以上だ。最高齢は函館市在住の黒田正二さん(88)。尋常小学校1年のとき、病気療養のため親類に預けられるなどして「一貫した教育を受けられなかつた」との思いがずっと心に引っかかつていて、同塾の門をたたいた。

授業では「右」と「左」の筆順の違いなど、戸惑うことも少なくないといふ。でも、黒田さんは「些細なことでもいろいろと覚えられることがうれしい。人生いくつになつても勉強ですから」と笑顔で話している。